

畑治郎右衛門と善寶寺五百羅漢堂諸像

長谷洋一 HASE, Youichi / 関西大学文学部教授

笹岡直美 SASAOKA, Naomi / 文化財保存修復研究センター研究員・准教授

はじめに

2015年から保存修復研究センターによる鶴岡市善寶寺五百羅漢堂諸像の保存修復事業が開始され、今年度で10年を迎える¹。これまでの保存修復事業を通じて、羅漢像の模刻から見た造像技法の考察をはじめ耳の形状から畑治郎右衛門の特徴に関する研究や羅漢像頭部の「錐点」に着目した研究など多数の研究成果が認められる²。

保存修復事業に伴って五百羅漢堂各像から多数の墨書銘が確認されている。墨書銘は、附番や符丁をはじめ「あごろもち」(羅漢像【18-28】)といった像の形姿に関わる内容や制作者(仏師)名を記したものなど多岐にわたる。

善寶寺五百羅漢堂諸像の造立は、京都仏師の畑治郎右衛門³が主宰したとみられるが、畑治郎右衛門の経歴についてはあまり紹介されていない。

本稿では、畑治郎右衛門について紹介し善寶寺五百羅漢堂諸像の造立との関係について考察する。

1. 畑治郎右衛門

畑治郎右衛門は、「本朝大仏師正統系図并末流」⁴(以下「大仏師系図」)に、幕府・禁裏御用を務めた七條左京家31代棟梁の康朝(宝暦9年〈1759〉生～文政9年〈1826〉没)の弟子と記され、居所は「六條居住」と記している。

これまで五百羅漢堂諸像から判明した畑治郎右衛門の墨書銘は次のとおりである。

広目天像体内銘：「高井為義／行年廿才／西六條畑治良右衛門御用」

広目天邪鬼像底銘：「安政二／卯四月廿二□／廣目天尊／大佛師／畑康傳」(図1)

広目天像台座裏面銘：「廣目天尊／惣佛師／畑治良右衛門 [(削除抹消)]」(図2)

大黒天像台座：「安政三丙辰年／京大佛師／畑治良右衛門／作」

清水平三郎像首柄底部：「畑」

羅漢像【22-30】框座：「畑治郎右衛門」

羅漢像【23-30】像底：「畑治郎右衛□(門)」

羅漢像【15-30】岩座：「□(畑) □郎」

羅漢像【12-29】岩材：「大佛師／畑治郎右衛門」



図1 広目天像台座裏面銘



図2 広目天像邪鬼像底銘

広目天邪鬼像底銘、羅漢像【12-29】岩材に「大佛師」、広目天邪鬼像台座銘に「惣佛師」と記することから畑治郎右衛門が五百羅漢堂諸像の造立を主宰したことが改めて確認できる。

畑治郎右衛門の事績としては、このほか以下の12件をあげることが出来る⁵。(作品名のみは制作)

・紀年銘作例

寛保2年(1742) 奈良・広陵町定願寺弘法大師倚像

寛政4年(1792) 京都・京都市醍醐寺牡丹蒔絵居箱・香炉箱

文化14年(1817) 山形・米沢市龍泉寺十六羅漢像

天保2年(1831) 山形・高島町玉龍院祖巖良

印倚像

元治元年（1864）滋賀・近江八幡市願證寺阿
弥陀如来像台座

・年紀不明の作例

山形・高島町玉龍院五百羅漢像

山形・長井市玉林寺道元・瑩山紹瑾禪師坐像、
中興和尚像、大権修利菩薩像、道元禪
師像

青森・佐井村長福寺弁財天坐像

愛知・岡崎市清涼寺釈迦如来立像

兵庫・三田市西方寺親鸞聖人坐像

広島・呉市法専寺阿弥陀如来立像

神奈川・横須賀市徳寿院十一面観音坐像修理⁶

広目天邪鬼像底銘の「畑康傳」については、高
島町玉龍院祖巖良印像に「畑治郎右衛門／康傳作」、
長井市玉林寺道元禪師像・中興和尚像に「畑治郎
右衛門／康傳」、清涼寺釈迦如来立像に「大佛師
／畑治、郎^(ママ)、門／康傳／京都西六条」と記
され、畑治郎右衛門と畑康傳は同一人と推測する。

十大弟子像8台座銘に記す「西六條御□（前）
通一同」は、玉龍院や玉林寺諸像に記された「京
都西六条／御前通／西洞院東江入丁」（現在の京
都市下京区正面通西洞院東入蛭子水町）であり、
「大仏師系図」記載の「六條居住」を裏付けている。

2020年に龍谷ミュージアムで畑治郎右衛門家所
蔵の「仏像のひな型」展が開催され「畑家系図」（原
本所在不明）が紹介された。「畑家系図」では、
初代定玄（寛永5年〈1628〉没）から15代定康（平
成26年〈2014〉没）までの系譜が示されている。

奈良・定願寺弘法大師像台座天板裏銘札には、
「于時寛保二年／戌九月吉日」「此御影作者京七条
大仏師／先祖從定朝法橋廿七代之末流大仏工／畑
定玄子定祐造者也大仏師／畑治左エ門／西六条御
堂筋西洞院東入町住人」（図3）と記され、「定朝
法橋廿七代之末流大仏工」である畑定玄の子「定
祐」が制作したことを記している。定朝法橋廿七
代は七條左京家27代康傳を示すが、「大仏師系図」
によれば27代康傳は元禄13年（1700）2月25日に
44歳で没しており、初代定玄が27代康傳の弟子と
すると、「畑家系図」定玄の寛永5年は寶永5年
（1708）の誤写とみられ、初代畑治郎右衛門は17
世紀後半以降に活動した京都仏師と考えられる。

後述するように五百羅漢堂諸像の大半は、嘉永
2年（1849）から安政2年（1855）の間に制作され
たと考えられている。「畑家系図」では、10代定
誓が文化11年（1814）に没し11代教圓が明治4年

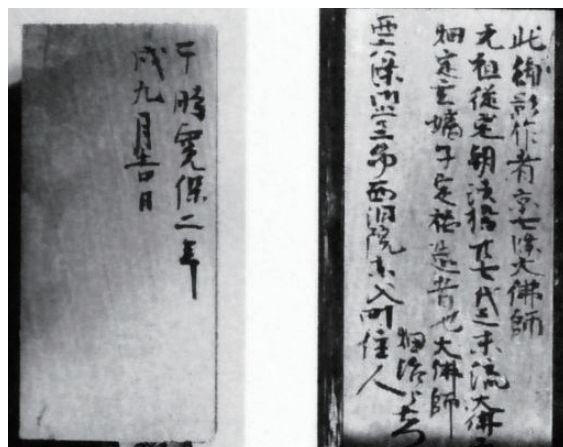


図3 奈良・定願寺弘法大師像天板裏銘札

（1871）に没したとすることから、五百羅漢堂諸
像の造立は11代教圓が主宰したとみられる。ただ
8代定俊が文化元年（1804）、9代浄寛が同9年
（1812）、10代定誓が同11年（1814）にそれぞれ没
していることから「畑家系図」が単純な父子による
嗣子関係を示しているとは思われない。

米沢市龍泉寺十六羅漢像台座裏には、「御體／
御首者三十一世康朝作」「三十一世法眼^(ママ)唐 朝／弟
子／畑次郎右衛門作之」「田中儀兵衛作／左京時
／田中儀兵衛作」の銘記があり、康朝と共に畑治
郎右衛門、田中儀兵衛が十六羅漢像を制作したこ
とが知られる。これ以降、畑治郎右衛門は高島町
玉龍院や長井市玉林寺の諸像など山形各地で造像
活動を展開していく。

2021年の龍谷ミュージアム「仏像のひな型Ⅱ」
展では、畑治郎右衛門が摂州新庄明教寺宛に発給
した本尊の台座・光背の再興にかかる「覚」（個
人蔵）（図4）が出品された。

摂州新庄明教寺は、現在の大阪・大阪市東淀川
区下新庄の浄土真宗本願寺派明教寺に該当し、内
容から江戸時代末期に作成された文書とみられる。

「覚」の末尾には「御本山御境内／御佛師所／
畑治良右衛門」の署名があり、「人」の下に「西

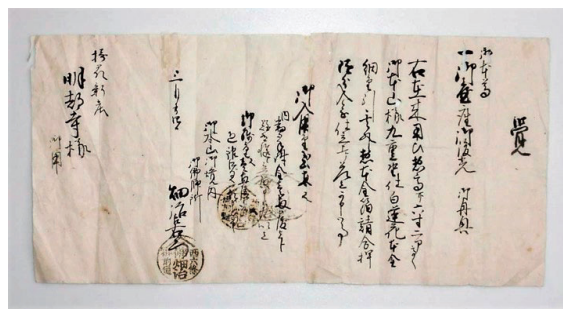


図4 個人蔵「覚」

六條／佛畑治／御前通」の墨文丸印を押印している（図5）。

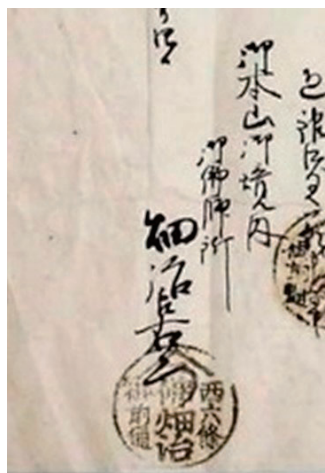


図5 個人蔵「覚」部分

畑治郎右衛門の居所「西六条御前通西洞院東江入丁」は、浄土真宗本願寺派本山の西本願寺から東に約300m離れた位置にあたり、「覚」の署名からは畑治郎右衛門が江戸時代末期には浄土真宗本願寺派の本山仏師であったことを示している。

浄土真宗本願寺派の本山仏師としては、延宝5年（1677）に本山仏師となった渡辺康雲（幸運）が知られ、延享版『京羽二重大全』（延享2年〈1745〉）から『都商職街風聞』（文久4年〈1864〉）までの各京都案内記に「東中筋花屋町下ル町（西中筋花屋町上ル町） 西本願寺仏師 渡辺幸運」として名を連ねる。しかし『平安人物志』天保9年（1838）版・嘉永5年（1852）版には、「画」の項に「渡辺丹崖 字千里号半醒 東中筋御前通 渡邊廣雲」（図6）とみえ渡辺康雲は画師としても知られていた⁷。

畑治郎右衛門による浄土真宗関係の事績としては、元治元年の滋賀・願證寺⁸阿弥陀如来立像台座、兵庫・西方寺親鸞聖人像、広島・法専寺阿弥陀如来立像の制作が確認でき、明治44年（1911）の親鸞六百五十回大遠忌法要記念誌『遠忌大観』にも「御本山御用達 大仏師畑治良右衛門」と名があることから幕末期以降、畑治郎右衛門は西本願寺本山仏師に就いていたとみられる。

「畑家系図」では、明治4年に11代教圓が没した後、12代教通が明治12年（1879）に、13代定秀は大正9年（1920）にそれぞれ没している。

明治維新後の京都仏師の間では、仏師は引き続き神仏像を制作するのか、あるいは木彫刻に転向し近代木彫刻家をめざすべきかの選択を迫られる。



図6 嘉永五年版『平安人物志』

13代定秀の事項ながら、明治19年（1886）11月21日に京都美術彫刻業組合が設立認可となり（明治19年11月23・25日付『日出新聞』）、活動を行うものの、今後の京都彫刻界の方向性一仏像か近代木彫刻か—について混迷が続き収拾がつかなかった。そこで明治27年（1894）9月12日に現状の衰微打開のため規約改正の総会を開催し同組長に後者の立場をとる田中宗祐を、副組長に前者の立場をとる畑治郎右衛門を選出している（明治27年9月14日付『日出新聞』）。

以後も畑治郎右衛門の名は、『帝国信用録』、『日本紳士録』等に仏具商、仏具製造業、仏師職として掲載されている。

2. 19世紀以降の七條左京家

「大仏師系図」には、康朝弟子として畑治郎右衛門のほか福地善慶、井上友蔵、34代康敬弟子に福島長蔵、中村文蔵、三谷忠蔵、35代康敬の弟子として北村助蔵の名を掲載している。

19世紀以降、七條左京家の弟子はどのような状況に置かれていたのだろうか。

これについては既に拙稿で述べた⁹が、「大仏師系図」によると、康朝没後の七條左京家は、康朝の三男康勝、二男康布、長男康敬と継がれ、系譜の混乱が生じている。

康朝が文政元年（1818）5月7日に60歳で没したのち、長男康敬が同年12月19日に35歳で法橋に叙位する¹⁰。しかし康朝生前の文化11年（1815）3月2日に三男康勝が他者（おそらく絵師了琢¹¹）の推薦を得てわずか19歳で法橋を叙位し幕府御用の大仏師職に就いている。しかし康勝は文政2年（1819）3月5日に病気により大仏師職を辞し¹²、

「大仏師系図」によれば、翌年4月3日に27歳の若さで亡くなってしまう。このようにみると康敬35歳での法橋叙位は仏師としてはあまりに遅いスタートといえる。

康敬の事績は、「大仏師系図」に文政11年（1828）正月に伊勢一身田御坊へ聖徳太子十六歳像を調進した記事のほか9件の事績を掲げている。他に文政元年（1818）に山形市・金勝寺釈迦如来坐像の制作、天保10年（1839）に京都・祇園祭の函谷鉾稚児人形「嘉多丸」の制作、弘化4年（1847）に鹿児島・花尾神社所蔵の七条仏師康湛作厨子入勢至菩薩坐像（御長九分）の極状（鑑定書）発給¹³が確認できるものの、幕府・禁裏御用を務めた七條左京家棟梁の事績としては、極めて乏しい¹⁴。

康朝没後の後嗣を巡る混乱が生じた七條左京家は、もはや弟子を擁した仏師工房ではなく棟梁だけで造像が完結する個人工房に衰退したといえる。

衰退する七條左京家で、畑治郎右衛門をはじめとする弟子たちは本家（七條左京家）に頼ることなく、これまで以上に自らで造像の機会を見い出さなければならなかったと思われる。またこの頃には、京都の大寺院等での仏像等の制作や修理もひと段落し、京都仏師も減少しつつあった¹⁵。

こうした状況で、七條左京家の弟子のうちでも年長とみられる畑治郎右衛門は、七條左京家棟梁である康朝・康敬の弟子たちを率いて造像活動を維持しなければならなかったと思われる。

その表われとして、畑治郎右衛門は青森・長福寺弁財天坐像台座銘に「本家大仏師分家」（図7）と記し、また「康傳」銘を付記し、あるいは「畑康傳」を名乗ったものと考えられる。



図7 青森・長福寺弁財天坐像台座銘

この時期、北前船の発達により京都との関係を深めた日本海地方での京都仏師による造像需要は、衰退する京都仏師にとって非常に魅力的であった。

北海道・小樽市宗圓寺五百羅漢像（破損像）には、「京都仏師、金屋こと浅田」、「寺町四条下高屋事、大仏師浅田忠べ」の墨書銘が確認されている¹⁶。「寺町四条下高屋事、大仏師浅田忠べ」は、天保4年（1833）『京都買物獨案内』記載の「御仏像 御位牌 寺町四条下ル金屋忠兵衛」の制作とみられ、また秋田・三種町鳳来院十六羅漢像は、京都・寺町四条貞安前之町に住む西田立慶による制作である。

京都仏師が日本海地方での造像需要を賄うなかで山形も例外ではなく、康朝弟子の福地善慶は寛政8年（1796）に白鷹町相応院大日如来坐像（図8・図9）を制作し、西田立慶も文化2年（1805）に山形市明源寺毘沙門天像、文化7年（1810）にも高島町西来院大権修利菩薩像・達磨大師像を制作、竹内右門は文化11年（1814）に東根市薬師寺金剛



図8 白鷹町相応院大日如来坐像



図9 同 光背裏面朱書銘

力士像を制作するなど、山形も京都仏師の造像活動の場となっていた。

3. 五百羅漢堂諸像の造立

善寶寺文書「五百羅漢助縁化簿」（嘉永2年〈1849〉10月）序には、天保14年（1843）に僧春山が善寶寺に晋山した時には、五百羅漢像のうち30軀が完成していたが、未だ五百羅漢像として完備していなかった。春山が年を経て病身になり五百羅漢像完備の願いは叶い難く思っていたところ、申年（嘉永元年〈1848〉・戊申）11月に松前藩の伊達・栖原両家の代参として清水が善寶寺を訪れ、清水が伊達・栖原両家の援助を受け「尊像全備せん事を乞」い上京、大仏師に羅漢尊像建立の儀を申入れたとする。

伊達・栖原・清水の3名は、五百羅漢堂に安置される30軀の袈裟姿の俗人肖像彫刻の像主にあたり、木札から栖原六右衛門（寄付者）・伊達林右衛門（寄付者）・清水平三郎（発願主）であることがわかる。また堂内棟札から安政2年（1855）に五百羅漢堂が落慶したことがわかる。

畑治郎右衛門による善寶寺五百羅漢堂諸像の造立は、先に記したように京都仏師による日本海地方での造像活動の展開を示す好例と考えられるが、畑以外の京都仏師も活動しており、畑治郎右衛門が五百羅漢堂諸像造立に起用された直接的な根拠とはならない。

善寶寺五百羅漢堂は、安政2年に棟梁本間勘蔵、副棟梁・彫刻を劔持嘉右衛門が担当して建立された。総門は安政3年（1856）に棟梁劔持嘉右衛門による建立で、山門は文久2年（1862）に劔持嘉右衛門・篠吉と脇棟梁の奥山富五郎、龍華庵も明治12年（1879）から翌年にかけて棟梁劔持嘉右衛門により建立されている。劔持嘉右衛門は幕末から明治にかけて善寶寺御用大工ともいえるべき存在であった。

『新編庄内人名辞典』などによると、劔持嘉右衛門は、文化7（1810）4月8日に出羽国田川郡大岩川村（現在の鶴岡市大岩川）に生まれ、16歳の時に江戸に出て飛騨高山出身の宮大工小林源造政長のもとで25歳まで修業し、次いで京都に出て仏師畑治郎右衛門について32歳まで彫刻技術を磨き、帰郷後は善寶寺工匠になったとする¹⁷。

ただ現状では、江戸の宮大工小林源造政長の名は他史料からは見いだせず、信州佐久野沢村出身の小林源蔵昌長の誤記と思われる。小林源蔵昌長

（寛政7年〈1795〉生～安政4年〈1858〉没）は、嘉永2年（1849）に長野・佐久市貞祥寺三重塔を、また軽井沢町長倉神社本殿を手掛け、安政4年（1857）には『独稽古隅矩雛形』を著している。

『新編庄内人名辞典』などから劔持嘉右衛門は、天保7年（1836）から同13年（1842）まで畑治郎右衛門について彫刻技術を磨いていたことになる。天保14年に春山が善寶寺に晋山、「かねて心掛候宿願の五百羅漢三十軀」（『五百羅漢助縁化簿』）が制作された時期は、劔持嘉右衛門が畑治郎右衛門について彫刻技術を磨いた時期と重なり、先行制作の30軀も京都仏師とみられている。畑治郎右衛門のもとで劔持嘉右衛門は先行制作の羅漢像を見聞し、同郷の地縁もあって帰郷後に善寶寺工匠になったと考えられる。このことから嘉永2年以降の五百羅漢堂諸像の造立は、善寶寺工匠の劔持嘉右衛門が善寶寺に対して自らが師事した畑治郎右衛門を紹介斡旋したことで、再び畑治郎右衛門が主宰となって五百羅漢堂諸像を制作したと考えられる。

4. そのほかの仏師

改めて善寶寺五百羅漢堂諸像の墨書銘についてみると、畑治郎右衛門以外の仏師名も記されている。

羅漢像【05-28】の像底には、「御注文書／一御木佛尊像／御再興」「大□（楚カ）んじ物／御□□／一五百羅漢尊像／御手□／羅／羅／羅／通」「福嶋長蔵／本朝家則／吉川□（友カ）蔵／高井鳥蔵／福嶋長蔵／□」（図10）と記されている。

銘記の「大□（楚カ）んじ物／御□□」は、判読し難い部分があるものの、類似の語句として山形市・金勝寺五百羅漢像付属の廻船荷札（現在、所在不明）に「大そんじぬき物御用心」と記されている。文意としては、品物を破損汚濁すると大損（大きな賠償請求が発生）するので取扱いに注



図10 羅漢像【05-28】像底銘

意せよと思われ、羅漢像【05-28】の当該銘記も廻船荷札とほぼ同意であると思われる。

また羅漢像【23-30】像底には「羽州庄内大山／善寶寺様行／御役僧様」と記されており、五百羅漢堂諸像は京都で制作され、五百羅漢像本軀と岩座・框座・光背がそれぞれ別梱包されて海路で鶴岡・加茂港¹⁸まで運ばれ、加茂港から善寶寺まで陸路で搬入、善寶寺で本軀と岩座・框座・光背が組立てられて安置されたと想定される。

五百羅漢像の岩座や框座に附番の他に「ひさにおく」（羅漢像【13-28】）や「ひさ立 合掌」（羅漢像【12-28】）、「左りて／けさ持／ほ□（す？）もち」（羅漢像【20-28】）など羅漢像の形姿に関する情報が付属の岩座や框座に記されていることもこの想定を裏付ける。

羅漢像【05-28】には、福嶋長蔵、本朝家則、吉川□（友）蔵、高井鳥蔵の仏師名が認められる。

福嶋長蔵の銘記は、このほか羅漢像【12-29】框座に「長蔵□（円に正方形を描く記号）」、羅漢像【25-30】岩座の「福嶋作／岩ニ付」がある。

先に触れたように、福嶋長蔵は「大仏師系図」に34代康敬弟子として記載された仏師である。

本朝家則は、羅漢像【12-22】框座に「本朝作足手／□け」と記され、羅漢像【27-29】像底には「本朝圓治」と記される。共に本朝姓を名乗ることから親子とも思えるが、他の事績が確認できず不明である。

吉川□（友）蔵は、羅漢像【24-31】の岩座・框座内に「よし□（川カ）／ゆひをし」、羅漢像【13-28】岩座にも「吉川作」「左手つく」、羅漢像【24-30】框座に「吉川作／□く」、羅漢像【10-31】框座天板（別像の天板か）に「吉川作」と記されている。

吉川友蔵は、寛政12年（1800）に長野・駒ヶ根市光前寺普賢菩薩像¹⁹、安永7年（1778）に高知・須崎市子安地藏堂興教大師像、天明5年（1785）に須崎市地藏堂地藏菩薩半跏像を制作している²⁰。居所は、「京高辻通室町西へ入丁」（子安地藏堂興教大師像）で、市井の京都仏師とみられる。

高井鳥蔵は、羅漢像【05-28】以外にその名を見出せず事績も不明だが、広目天像体内銘には「高井為義／行年廿才」とみえ、同姓で年齢も若いことから、高井為義は高井鳥蔵の子息かもしれない。

また十大弟子像5の首柄底面には、「造佛舎」の銘記（図11）が確認できる。

「造佛舎」については、嘉永5年（1852）『平安



図11 十大弟子像5首柄底面

鑿		刀良刀銀	
上嶋景利	細奇工	范宗保	小林良典
小嶋形頼	新市常南	四條烏丸東	再出
登美子	再出	中村宗保	
大田政武	上嶋十吉		
大田政武			

図12 嘉永五年版『平安人物志』

人物志』「良刀」の項にみえる「范宗保 号造佛舎 四條烏丸東 中村宗保」（図12）に該当するとみられる²¹。

中村宗保の事績としては、大阪・枚方市片埜神社旧蔵帝釈天像（現在、同市清岸寺に安置）の修理や東京・千歳村（現在の世田谷区上祖師谷）千歳観音堂十一面観音像を上げることが出来る²²。

このほか羅漢像【11-31】、羅漢像【22-31】の岩座・框座に「石田」、羅漢像【25-32】岩座に「三百四十四／石田」と記され、また十大弟子3台座に「相田」（長円で囲む）と記すが、いずれも未詳である。

羅漢像【08-28】框座には、「彩色□（亀？）□（治？）郎」、羅漢像【16-30】岩座・框座に「亀郎」と記され、亀次郎は彩色を担当した人名とみられる。

以上、畑治郎右衛門の配下にいたと思われる仏師・彩色師についてみてきた。

七條左京家「分家」として「畑康傳」を名乗る

畑治郎右衛門は、34代康敬弟子の福嶋長蔵や市井の京都仏師である吉川友蔵や中村宗保などからなる造像集団を組織し、五百羅漢堂諸像の造立にあたったと考えられる。年齢・経歴や師弟関係、工房環境も異なる仏師を取りまとめて統一性のある五百羅漢堂諸像が制作できたのは、規範となった「錐点」もあるが、なにより配下の仏師が畑治郎右衛門に寄せる信望の厚さに拠るところが大きいとみられる。

おわりに

以上、畑治郎右衛門の経歴と五百羅漢堂諸像造立の一端について記した。

五百羅漢堂諸像造立の掉尾を飾る像として大黒天像がある。台座裏面に「安政三丙辰年／京大仏師／畑治良右衛門／作」の銘記があり、五百羅漢堂落慶の翌年に制作された像である。既に指摘されたように大黒天像は「畑自身による奉納」と考えられる。

新潟・佐渡市弘仁寺金剛力士像は、天保3年(1832)に京都・建仁寺町松原下ル町に住む「智積院仏師福岡長慶」により造立された。

金剛力士像完成の折、福岡長慶は制作中に逗留していた「佐州五十里町」の個人に御礼として大黒天像を制作贈呈している²³。福岡長慶と同じく畑治郎右衛門は、善寶寺へ五百羅漢堂諸像造立の御礼として大黒天像を制作奉納したと考えられる。

五百羅漢堂諸像については、彩色師も含めた具体的な造像組織や造立費用の問題などの課題も残るが、今後とも保存修復事業に携わる方々と共働しながら善寶寺五百羅漢像保存修復事業の遂行に尽力していきたい。

註記

¹ なお善寶寺五百羅漢堂諸像の保存修復事業の概要については、本紀要「善寶寺五百羅漢像保存修復業務 2024年度事業報告」(52～71ページ)を参照されたい。

² 門田真実・柿田喜則・笹岡直美「龍澤山善寶寺五百羅漢像模刻制作から見る造像技法の一考察」『令和3年度 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要』2021年、込山真生「耳の形状にみる仏師畑次郎右衛門の特徴―善寶寺五百羅漢像を中心に―」(2022年度文化財保存修復学科卒業研究)、佐藤真依・柿田喜則・笹岡直美「京都仏師・畑次郎右衛門による錐点技

法利用についての研究―龍澤山善寶寺五百羅漢像を中心に―」『令和4年度 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要』2022年など。

³ 各作品の銘記は報告書により「畑治良右衛門」「畑治郎右衛門」「畑治左エ門」「畑治郎左衛門」とばらつきが認められるが、本稿では「畑治郎右衛門」に統一して記述する。

⁴ 「本朝大仏師正統系図并末流」『美術研究』11、東京文化財研究所 1932年

⁵ 個々の銘記については近世仏師事績データベース (<http://www.busshi.net/search.cgi>) を参照されたい。このほかアメリカ・個人蔵阿弥陀三尊像(ボストン美術館寄託)が元文2年(1737)にHata Sadasuke(畑定祐)、Hata Yoshikazuの制作とされるが、筆者未見。

⁶ 徳寿院十一面観音坐像修理銘には「豊橋大仏師／畑治右衛門／康伝」とあり、豊橋の地名から近代の修理であることがわかる。

⁷ 弘化4年(1847)『皇都書画人名録』にも「渡辺丹涯」は「北宗圓故應瑞先生門人」と記され、円山応挙長男の円山応瑞門人の画師として紹介されている。

⁸ 願證寺は、現在真宗大谷派の寺院となっている。

⁹ 長谷洋一「江戸時代後期における京都仏師の東北地方進出と在地仏師の動向」『關西大學文學論集』66巻2号 2016年、岡田靖・長谷洋一「江戸時代から明治期における京仏師と地方仏師」『国立歴史民俗博物館研究報告』230号 2021年

¹⁰ 『地下家伝』7「大仏師職 七條」三上景文・正宗敦夫『地下家伝』1-7 日本古典全集刊行会 1935年

¹¹ 享保13年(1728)に七條左京家29代康音が14歳で法橋位を申請した際の書状に「傍例」として法橋了琢が15歳で法橋を申請したことをあげている。(長谷洋一「康祐没後の近世七条仏師―「内證有之ニヨツテ、小仏師康傳相務之」―」『關西大學文學論集』61巻2号 2011年)

¹² 前掲註9

¹³ 「華尾山御宮其外取調帳」(『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 地誌備考三』「日置郡地誌備考 追録下」 鹿児島県歴史資料センター黎明館 2016年

¹⁴ このほか「三十四代左京／法橋康敬作」銘の阿弥陀如来坐像雛型が龍谷ミュージアムに寄託される。

- ¹⁵ 『佛師職慎申堅メ控』によれば、明和3（1766）に「一百有九人」を数えた京都仏師も文政4（1821）には「新家古格仏師職方三拾余家」に減少したと記している。（三山進「『佛師職慎申堅メ控』と京仏師林如水」『鎌倉』78 鎌倉文化研究会 1995年）
- ¹⁶ 昭和37年6月30付毎日新聞小樽版。なお資料の所在について小樽商科大学商学部高野宏康氏よりご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。
- ¹⁷ 庄内人名辞典刊行会編『新編庄内人名辞典』同刊行会 1986年、高橋恒夫「出羽の在郷大工集団とその活動について—江戸期および明治期の遺構・文献資料を中心に—」『日本建築学会計画系論文報告集』390号 1988年〔（高橋恒夫『近世在方集住大工の研究』中央公論美術出版 2010年）所収〕
- ¹⁸ 羅漢像【23-30】に「羽州加加之浦／圓□」とあり、加茂港が荒波や強風の避難寄港地「荒波かかり潤」と思われ、その意味であろうか。
- ¹⁹ 上伊那誌刊行会『長野県上伊那誌』2歴史編 上伊那誌刊行会 1962年
- ²⁰ 前田和男『私のメモ帳』第5 私家版 2007年
- ²¹ 范宗保と黄檗彫刻で知られる仏工范道生とは活動時期が大いに異なり、無関係と考えられる。
- ²² 田中公明「哲学堂と田中良雄・田中百嶺兄弟」『国際井上円了研究』8、国際井上円了学会、2020年
- ²³ 羽茂町『羽茂町誌』第3巻近世の羽茂 1993年